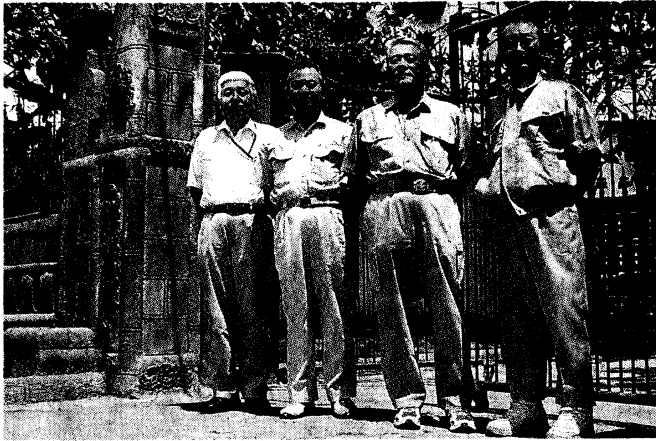


4人、支援に生きがい



東ティモールで不発弾処理に取り組む九州出身の4人組。左から久光さん、大脇さん、岸良さん、徳丸さん

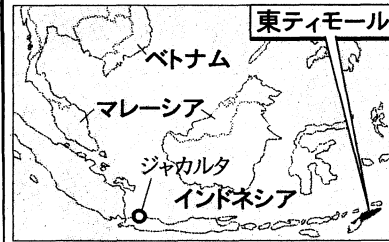
我ら九州の陸自OB

「不発弾処理に 第2の人生」

赤道に近いインドネシア諸島の東ティモール民主共和国で、内戦時に残された不発弾の処理に取り組む日本人の熟年4人組がいる。民間非営利団体(NPO)による途上国支援活動として派遣された陸上自衛隊OBで、なぜか全員が九州出身だ。現役時代に覚えた技術を、三年前に独立したばかりの若い国の安全のために生かそうと、照りつける太陽の下で汗を流している。

(バンコク・永田健)

東ティモール共和国



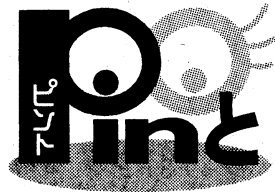
このNPOは日本地雷処理・復興支援センター

(JDRAC、本部・東京)。今年五月から東ティモールでの活動を始めた。首都・ティリの事務所を訪れると、白髪交じりの四人が迎えてくれた。四人は久光禮敬さん(左)・佐賀県鳥栖市出身、大脇友三郎さん(左二)・鹿児島市出身、岸良巖さん(右二)・同、徳丸順一郎さん(右)・大分市出身。所長の久光さんによ

ると、駐在している国連の機関から、外務省を通じてJDRACに「不発弾処理の活動をやってほしい」との依頼があり、三人も同隊経験者で、久光さんが声をかけた。

東ティモールは、かつてポルトガルの植民地だったが、一九七四年にポルトガルが占権を放棄した直後、インドネシアから併合された。独立を目指す住民らは、ゲリラ戦で抵抗。一九九九年に住民投票により独立が決定し(独立は二〇〇二年)、国連の介入で安定が取り戻されるまで、局地的な戦闘が続いた。

自前で不発弾処理できる人材の育成だ。同国の警察官を選抜し、処理のノウハウを教えている。四人とも、派遣の話が来るまで、東ティモールについてほとんど知識がなかった。まさか自分の技術が、現役引退後に生かせるとは考えていなかった。この若い国の発展をお手伝いできて、生きがいを感じています。四人の共通の感慨である。



に、インドネシア軍、独立派、反独立派の民兵らが残した手りゅう弾、砲弾、弾丸などが多数放置され、農作業をする住民を脅かしている。太平洋戦争中は日本軍がティモール島を一時占領したことから、当時の弾丸なども

最終的には火薬を使つて爆破処理する予定。政府に依頼している火薬入手がまだなので、現在集めた不発弾は一方所に保管している。もうひとつ力を入れてるのが、他国に頼らず

「なあと、九州だから暑さには強い」とも思ったんです」と他の三人が笑った。